

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

鹿が壺

伊佐々王と不思議な穴の物語



伝説 鹿が壺
伊佐々王と不思議な穴の物語

紀行 鹿が壺から安志の里へ
～ 山間に息づいた「風土記の里」を訪ねる～
・ 姫路から北へ
・ 関の村と鹿が壺
・ 千年家
・ 安志姫神社
・ 塩野と六角古墳

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

鹿が壺

伊佐々王と不思議な穴の物語

今から1200年以上も昔のことです。現在の姫路市安富町（ひめじしやすとみちょう）の山のおくに、一頭の巨大な鹿（しか）が住んでいました。体の長さが六メートル、大きな角は七つに枝分かれしていて、背中にはササが生え、足には水かきがあるという怪物だったそうです。

もう何百年生きてはかわかりません。いつも数千頭もの鹿を従えた大鹿は、山を荒らし、里の人までおそうのでした。人々は、この大鹿を「伊佐々王（いざさおう）」と呼び、名前を聞いただけでふるえあがるほど恐れていました。

伊佐々王の暴れ方は、年を経るにつれてひどくなり、とうとう村の中でも大暴れするようになりましたので、里の人たちは散り散りににげるといったありさまになってしまいました。

この話を聞いた天皇は、播磨（はりま）の国中から兵士を集め、伊佐々王を退治するように命令しました。

伊佐々王と兵士たちの戦いははじまりました。兵士たちは勇敢（ゆうかん）に戦いましたが、伊佐々王はこれまでもまして暴れまわって、なかなかたおすことができません。それでも、兵士たちは木を切り、山を焼いてせめ立てたので、ついに伊佐々王も傷つき、つかれ果てて、谷のおくまで追いつめられました。

たくさんの兵士に囲まれた伊佐々王は、最後の力をふりしぼって大暴れに荒れくるきます。そのために、谷の大岩には次々と深い穴ができました。そしてとうとう、力つきると、「このあと、消ゆるなかれ！」とさげんで、岩の上に深く、自分の姿を残して死んでいったのでした。

伊佐々王が退治されたと聞いて、人々は安心して里へもどってきました。そしてそれ以来、この地を「安志（あんじ）」と呼ぶようになったそうです。

大鹿が横たわった姿に見える岩の穴は、いつのころからか、人々に「鹿が壺（つぼ）」と呼ばれるようになりました。

岩場にあるたくさんの穴のうち、いちばん深いのが「底なしの壺」です。大きな丸い穴の中には、谷川のきれいな水がたまっているのですが、あまりに深いので底は暗くて見えません。それで「底なし」と呼ばれているのです。この「底なしの壺」に石を投げこむと、竜神の怒りにふれて、大嵐になるとも伝えられています。ある人が唐傘（からかさ）に石をくくりつけて放りこんだ時には、とつぜん大嵐になり、川があふれて大洪水（こうずい）がおこったそうです。そして「底なしの壺」に放りこんだはずの唐傘が、のちに網干（あぼし）の海底からぼっかり浮かび上がったので、「底なしの壺」は、網干の海につながっているのだという人もいます。

紀行「鹿が壺から安志の里へ～山間に息づいた「風土記の里」を訪ねる～」 姫路から北へ

姫路市の西部から国道29号線を北上すると、やがて道は林田川（はやしだがわ）を渡って、その西に沿うように続いてゆく。雑木林と植林された杉や檜（ひのき）が混じる里山が、何となく心の落ち着きを感じさせて、まるで故郷に帰ったような気持ちにさせてくれる道である。やがて山が川へ迫るところを巻くように、道がカーブする「狭戸（せばと）」を通り過ぎると、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』に記された安志里（あんじのさと）である。

「安志（あんじ）」の交差点で国道と分かれ、中国道をくぐって、林田川の源流へと続く道を行く。この付近では、林田川は清流である。6月にはゲンジボタルの群舞が見られ、蛍狩り（採集ではなく眺めて楽しむことをいう。念のため。）にはよい場所である。

谷が狭まり、道が山腹に取り付いた先に、安富ダムとダム湖がある。湖面を見下ろしながら、カーブする道を行くと、門柱のように立つ巨岩のわきを通る。その先が、関の村である。

関の村と鹿が壺



鹿が壺

関は、林田川最上流部の谷に沿った小さな村で、のどかさ、山村の清々しい空気があふれている。毎年7月24日ころには、村中でいっせいにタイマツに火をともし、火の安全、五穀豊穡（ごこくほうじょう）や無病息災などを祈願する、荘厳な伝統行事「まんど（関の火祭り）」がおこなわれるが、最近ではこれに合わせてしの笛のコンサートなども催されたようである。その関の村の奥に車を停めて、険しくなる道をたどると、鹿が壺である。

鹿が壺は、巨大な岩盤の上を走る流れが、気が遠くなるような年月をかけて刻んだものだ。急斜面の岩盤の所々にある階段状の場所で、流れ落ちてきた石がたまる。その石が激しい流れによって、くるくると回るように動き、硬い岩盤にぶつかってわずがずつ削りとってゆき、やがて丸い穴がうがたれる。その繰り返しの結果、大小十数個の穴ができたのである。岩盤も削られるが、石も磨かれる。よく見てみると、小さな穴の中にも、必ず丸くなった石が入っている。

地学の世界では「ポットホール」と呼んで、必ずしも珍しい現象ではないそうだけれど、これほどたくさんのポットホールが集まっている場所は、そう多くないだろう。昔、この不思議な光景を見た人たちが、想像力をかきたてられたのもわかる気がする。

最大の穴が鹿ヶ壺（しかがつぼ）。「鹿が寝ている姿に似ている」という解説を読んで、その気になって見れば、確かに頭と、脚と、尾と、というふうにとどることができる。頭のちょうどよいあたりの岩に亀裂が走り、角のように見えるのがポイントであろう。それにしても、ずいぶん丸々と肥った鹿である。おそらく、いくつかのポットホールが順番に作られて、それがうまい具合につながった結果だと思われる。

それにしても、これを鹿に見立てた伝説は、『播磨国風土記』が編纂された奈良時代にはもう伝説になっていたのだから、それよりはるか前にできたものに違いない。今でもそれが鹿の姿に見えるということは、少なくとも千数百年もの間、穴の形はほとんど変わっていないということだから、こうした穴がうがたれるためには、さらに一けた、二けた長い年月がかかるに違いない。

その悠久な時間を知っているのは、安志の里の姫神様だけかもしれない。



鹿が壺(全景)



鹿が壺(案内板)

千年家

皆河の千年家
(全景)

関の村から帰路をたどりながら、いくつか訪ねてみたいところがある。この千年家（せんねんや）もそのひとつ。皆河（みなご）の集落のはずれに、ぼつんと見える茅葺（かやぶき）屋根である。室町時代末に建てられたそうだから、およそ450年前ということになるのか。民家としては日本でも屈指の古さで、国の重要文化財に指定されている。高い棟から長くのびた屋根と低い軒の曲線が、背景の山々と相まってとても美しい。土・日・祭日であれば内部も公開されている。

実はこの千年家にも伝説がある。この家の床下には「亀石（かめいし）」という大岩があって、いく度かの火難の折には、水を噴出して家を守ったというのだ。400年以上もの間、もっとも恐るべき火災を免れてきたことが、そんな伝説を生んだのだろうか。残念なことにその亀石を見ることはできなかったが。



皆河の千年家

安志姫神社



安志姫神社(鳥居)



安志姫神社(境内)

安志集落から東へ少し行った、三森（みつもり）の集落に祭られているのが、安志の里を守る姫神様である。『播磨国風土記』の伝説によれば、昔、伊和大神（いわのおおかみ）が安志姫神を見初めて求婚したのに、安志姫がこれを断ったため、怒った大神は林田川の源流を石でせき止めて三方の里へ流れるようにし、そのせいで林田川は水が少ないのだとされている。

安志姫神社
(参道)

結婚を断られたくらいで、ずいぶんひどい仕打ちだが、この伊和大神という人は、佐用郡（さようぐん）でも佐用都姫（さよつひめ）神に稲作りの競争で負けて追い出されているし、どうも女性運はなかったようだ。

本殿へ続く階段はすっかりこけむしている。

この神社に祈願すると、お乳がよく出るようになるとも言われていて、境内にもご神木の「乳の木」が祭られている。里を守り、里人とともにあった姫神様らしい穏やかな空気が漂っていた。



狛犬



安志姫神社(拜殿と本殿)

塩野と六角古墳



塩野六角古墳(遠景)

安志里でいちばん平地が広いのが、塩野（しおの）から植木野（うえきの）のあたりである。六角古墳は、この平野を見下ろす山腹にある。

1990年に発掘されるまでは、まったく無名の古墳であったが、六角形という特殊な形であることが判明して、脚光をあびた。7世紀中ごろに築かれたということで、葬られた人はわからないが、その時代を考えると、まさしく風土記の伝説を語り伝えていた世代だろう。古墳から長い石段を降りながら、ふとそんなことを考えた。

塩野六角古墳
(復元された石室)

塩野六角古墳からの眺望

用語解説

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【鹿が壺】しかがつぼ

地学上は甌穴（おうけつ、ポットホール）と呼ばれる。これは急傾斜の溪流の河床が岩盤であった場合、そのわずかな凹みにたまった礫（れき）や砂が、水流によって旋回することで岩盤をまるく浸食してできる。

甌穴自体は珍しいものではないが、鹿が壺の場合のように、多数の甌穴が群集する例はまれである。これは、基盤の岩石（流紋岩質溶結凝灰岩）が比較的均質、緻密で、谷の傾斜と同一方向の流理面があることが、甌穴の形成に適していたためとされている。

姫路市指定天然記念物。

【安志姫神社】あんじひめじんじゃ

『播磨国風土記』に記された安師里（あなしのさと）の、里名の起源となった安師比売神（あなしひめのかみ）を祭る神社。安師比売は、本来は在地の巫女神であろうが、安師の名は、大和国の安師坐兵主神（あなしにいますひょうずのかみ）を勧請（かんじょう）したためとされている。

安師坐兵主神は鋳業神であることから、安志姫神社を製鉄に関わる神社と考え、安師里が製鉄をおこなっていたという記述を目にすることがあるが、安富町一帯の地質からみて、安志里での鉄の産出は否定される。

一方奈良時代には、宍粟郡の柏野里（かしわののさと、山崎町・千種町）、比地里（ひじのさと、山崎町）、安師里（あなしのさと、安富町）には山部が置かれていたことが明らかになっている。山部は朝廷に直属する山部連（やまべのむらじ）に統率された部民で、その名の通り山の産物を朝廷に納めることを務めとしていた。

上記の里のうち、柏野里は風土記に「鉄を出す」と記されていることから、比地里、安師里などの山部も、その運搬などに関わった可能性は残されている。こうしたことから、本来は土地の巫女（みこ）神を祭っていた所へ、大和の鋳業神が勧請されて一体化した可能性が指摘されている。

【伊和大神】いわのおおかみ

宍粟市一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おおなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名御魂神（おなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらしこおのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、「兵庫の貴重な景観」Bランクに選定されている。

【皆河の千年家】みなごのせんねんや

姫路市安富町皆河に所在する。正式な名称は古井家住宅。1967年重要文化財指定。千年家の名称は、安志藩の丸山政熙（まるやままさひろ）による『播州皆河邨千年家之記』（1836）が初出。それによると、秀吉が姫路城築城の際に、この家が無災の千年家と聞き、この家の垂木の一部を築城の材に用いたという伝承が残っている。

入母屋造り、草葺（ぶ）き屋根の家屋で、正面7間（13.9m）、側面4間（8.1m）の規模をもつ。現在の建物は、1970年の修理工事を経て、建築当初の状況に復元（一部推定復元）されている。

建築上は、畳敷きを全く念頭に置かない間取り寸法であること、正面の間取りが1室、背面の間取りが2室の3室構造となっていること（あるいは正面背面ともに1室の可能性もあるという）、土間と部屋の構造が同じであり、大黒柱をもつような上部構造ではないこと、柱間の寸法が不ぞろいであることなどから、室町時代後期ごろの建築と推定されている。

神戸市北区の箱木家住宅（箱木千年家）と並び、日本でわずか二棟残された最古の中世民家であり、民家建築の歴史を知る上で極めて重要な建築である。

【塩野六角古墳】しおのろっかくこふん

姫路市安富町塩野に所在する、古墳時代後期（終末期）の古墳。標高150～160mの東面する山腹に、単独で築造されている。1990～1991年におこなわれた発掘調査により、一辺の長さが3.8～4.4m、対辺長が6.8～7.3mの六角形を呈する古墳であることが明らかになった。前面の墳丘裾（ふんきゅうすそ）には列石がみられる。

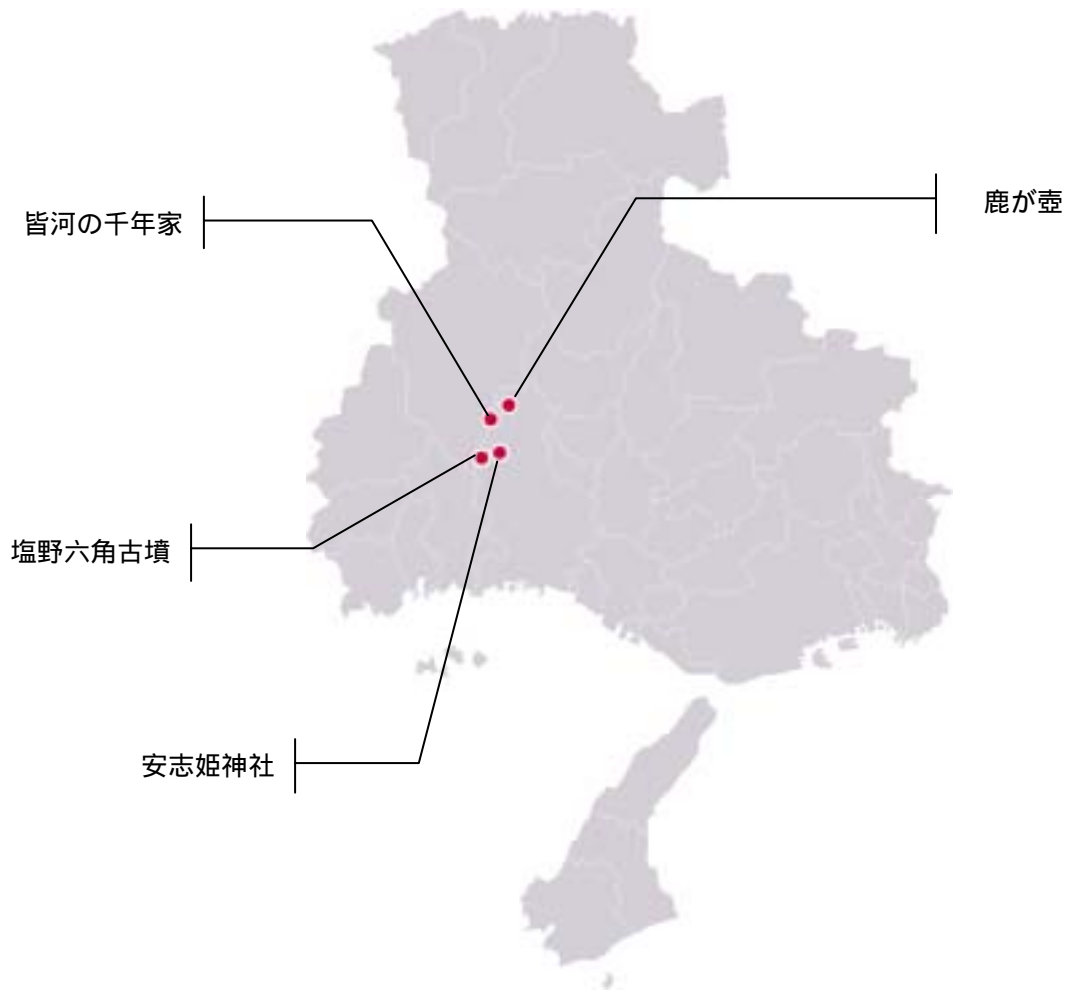
中心に、長さ4.4m、開口部幅1.1m、奥壁幅0.8m、高さ1.3mの横穴式石室が設けられている。石室内には礫（れき）を置いて棺台としているが、棺の跡などは見いだされていない。石室内からは、須恵器の長頸壺（ちょうけいつぼ）と埴（つき）が出土し、その形から7世紀中ごろのものとされている。被葬者は不明であるが、『播磨国風土記』に登場する山部氏をあてる説がある。

六角形の古墳は、ほかに奈良県マルコ山古墳、岡山県奥池3号墳の2基が知られるのみである。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	安富町史 通史編	1994	安富町史編集委員会	安富町
その他	伊和神社御由緒略記 参拝者用資料		伊和神社	伊和神社

所在地リスト



鹿が壺	姫路市安富町関775 より山へ入る
皆河の千年家	姫路市安富町皆河236-1
安志姫神社	姫路市安富町三森
塩野六角古墳	姫路市安富町塩野岡ノ上664

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日